

Name 作家名： 藤井香

Title of the project (work) プロジェクトまたは作品タイトル： 沈む舟

Year of realization 実現(予定)年： 宝くじが当たったら、その年

Description プロジェクトまたは作品についての記述：

抗えない節理、抗えないサイクルの中に「存在する」ということを感じられる舞踊作品を作りたいと思っている。

舞台構成、演出、内容の肉付けは、まだこれからだが、今考えていることは、迫ってくるような壁や、シーソーのように動く客席にできればいいな、と思っている。観客といえども、うかうかとは見てもらえず、ここに組み込まれて行ってしまおうような……。

ただ、これは「今」考えていることであって、「今」の考えはどんどん捨てて、変えて行く。なぜかと言うと、初期段階の私の発想は、いつも幼いからである。しかし、この作業は、「できそうにないからあきらめる。」という言い方に交換することもできる。

そういえば、SMFには優れた建築家の方々がいらっしゃる。私は、彼らと一緒に子供向けのワークショップ「かいじゅうたちのいるところ」や「おむすびころりん、おなかの旅」をやった時、彼らの魔法使いのような実力をこの目で見ています。彼らなら、この案にそれほど遠くない、優れた、しかも低コストで済む方法を知っているのではないだろうか……。

そういえば、SMFには優れた日本庭園を造る方々がいらっしゃる。北浦和公園に作られた「雲上に遊ぶ」というタイトルの、竹で作った雲の上の茶席は、圧倒的な存在感と創造性を放つ作品であった。

芸術と、現実の両方に根を張って生きてるように見受けられる、建築家と作庭師の方々の造形の強さは、この上なく新鮮で、接していて楽しく、また目標でもある。あのように強い作品を作れたら……と思うし、彼らと仕事もしてみたい。

さて、「沈む舟」は、ダンサー8人による30~40分作品にしたいと思っている。音楽は佐藤聡明作曲の「エメラルド・タブレット」を使用し、衣装デザイン&製作は、中村春子さんにお願いするつもりだ。

今回の宝船展では、この作品の中核をなす4分程のソロパートを作り、発表した。少し説明すると、静かにすべるように進む舟の両縁に足を置いて立ち、舟の動きに従って、静かに左右に揺れるさまを描く動きからスタートしてみた。沈む舟の中では、人の世界の時間軸と事象が壊れて、同時に秩序なく存在するような瞬間が起こる気がしたので、それを表現しようと模索した。ダンサーには、娘・藤井彩加に出演を依頼した。

写真：「宝船展アーティストトークにて」／撮影：中村元

